

はしもと
橋本

しゅうは
琇巴

刀身彫刻師

1949(昭和24)年～

1. 経歴・狭山市とのかかわり

長野県に生まれる。本名、橋本太郎。

1972(昭和47)年に専修大学を卒業。刀剣に興味を持ち、1982年(昭和57)年、刀身彫刻師の苔口仙琇氏に師事する。1991(平成3)年に師から「琇巴」の銘をいただき、独立する。狭山市に住んだのは、1997(同9)年で、母親が購入していた狭山市狭山台の土地に家を建てて住んだ。この年には「新作名刀展」の「刀身彫刻の部」で優秀賞を受賞、その後毎年受賞していたが、今は応募していない。現在は狭山市富士見に住み、工房で刀剣に注文主の思いを刻む。

2. 主な業績

狭山に住んで7年目の2003(平成15)年、狭山市立博物館で初めての個展「刀身彫刻～橋本琇巴展」を開催。刀身彫刻を施した25振の鉄剣を展示、刀剣関係者を驚かせた。

宝物、重要文化財の復元品制作の実績も上げた。2010(平成22)年、宮内庁正倉院の宝物「黄楊木把鞘刀子」(つげのきのつかさやのとうす)の復元品の制作で「象嵌」の部分を担当した。

さらに、京都の豊国神社の「骨喰藤四郎」(ほねばみとうしろ)の復元品の制作でも刀身彫刻の部分を担当している。豊臣秀吉が好み、大坂夏の陣で燃える大坂城とともに消えたが発見され、徳川家へ。波乱の刀剣と知られる。復元でも刀身彫刻を担当した。

特記すべきは、埼玉県行田市の「稻荷山古墳」から発掘された国宝「金錯銘鉄剣」の復元品の制作だ。刀の制作は宮入法廣氏、象嵌は橋本氏、研ぎは藤代興里氏と藤代龍哉氏。それぞれの分野の名工だ。鉄さびに覆われて発掘された鉄剣は、微細な金の光で本格調査し、金象嵌の115文字が発見され、「国宝」に指定された。今回の復元品の制作では、文字部分の金に混ぜる銀の比率、埋め込む穴の構造、工法など制作当時を厳密に再現している。国宝「金錯銘鉄剣」とこの鉄剣の制作当時を忠実に再現した「復元品」が並んだ展示は、2015(平成27)年12月5日から翌年2月21日、埼玉県立さきたま史跡の博物館で開かれた。(写真は、国宝「金錯銘鉄剣」(左)と復元品(右))



自宅の工房で作業する橋本琇巴氏

3. 特筆～これからのこと

橋本氏の自宅の工房を見た。青い作業衣の橋本氏は、分厚い木の台を使い短刀に向かい細いタガネを小さな金槌でたたき、短剣の表面を削る。刀剣を飾る彫刻も細い溝を彫り糸状の金を埋め込む「金象嵌」もこの作業台を使う。

橋本氏が1つの箱から女性用腕時計程のものを取り出した。「暇なとき作っていますが女性に人気があります」と言う。金象嵌の技術を使う女性用アクセサリだ。

これまでに刀身彫刻の刀剣の個展や実演をロンドンなど海外を含め50回以上開いているという。2019年8月に横浜高島屋で開いた「刀身彫刻 橋本琇巴展」では、従来の刀剣ファンの中高年の男性だけでなく、若い女性が多く来たという。「刀剣ギャル」の言葉が不自然でなくなっている。